

健康文化

音の世界

若栗 尚

以前、騒音について書いたことがあった。私たちが生きてゆく上で、騒音と無縁になれることは、殆ど無いといってもいい過ぎではないように思われる。

極、まれに、無響室とか遮音の良い部屋などで無騒音と思われる状態になることはある。このような場合でも、自分自身がある場にいるということにも厳しくいえば問題が残る。こう考えると、ある意味では、私たちの毎日の生活は、自分の必要でない、不快な音の中で営まれているといえる。

問題は、その音を必要な音、または、邪魔にならない音として許容できるか、邪魔な騒音として受けとるかであり、これは、前にも書いたように、聴く人によって、時には、同じ人でも受けとりかたが変わってくる。

これが、騒音の影響を考えると、厄介なことになる。

騒音の影響は、音の強さ、スペクトル構成、時間的な条件（発生する頻度、発生する時刻、継続時間）など物理的な要素だけでなく、受けとる人の個人的な感受性（そのときの精神的な状態の影響も含めて）、その人の置かれている、または、経験してきた社会的、文化的な背景、経歴が効いてくる。

これは、同じ国の中の騒音の規制、基準などを考える上でも問題になることがあるが、国際的な規制、基準について考えるときには、大切な要素になる。

堅苦しいことを並べてみても仕方がないし、多くの人々にとっては余り興味の無いことでもあろう。ただ、私たちの感じ方と外国の人たちの感じ方の差については、多少の興味も持っていただけるものと思って、少し取り上げてみることにする。

ある文献に2、3の国での“悩まされる音”ということで騒音の種類を挙げたものがあった。それによると、

イギリスでは、近隣騒音、道路交通騒音、戸外の人々の声、航空機騒音、鉄道騒音の順序であり、フランスでは、自動車交通騒音、近隣騒音、航空機騒音、

鉄道騒音の順序である。また、ナイジェリアでは、自動車交通騒音、レコード店の音、工場騒音、建設騒音、発電機の音、鉄道騒音の順序である。

日本では、一例として挙げると、自動車交通騒音、近隣騒音、建築工事音、工場騒音、電車騒音、航空機騒音、学校騒音の順序である。

もちろん、これらは、調査された地域の地域独特の諸条件にも左右されるものではあるが、道路交通騒音、自動車交通騒音が上位にあり、ナイジェリア以外では、近隣騒音も上位にある。

この交通騒音と近隣騒音には、音の性質にも受けとめ方にも、それぞれに特徴がある。

自動車交通騒音、航空機騒音、鉄道騒音などの交通騒音は、どこの国でも共通に悩まされる音の代表的なものであり、道路、線路、空路などの線、ラインを基盤に、その周辺への帯状の影響という形をとることが多い。

しかし、交通騒音は特別な場合をのぞいて、物理的な騒音の大きさと主観的な悩まされ方の間に、良い相関がみられるので、音源対策、遮音、防音対策で騒音レベルを低下させれば、その影響は軽減できることが多い。

一方、近隣騒音は、近年、人口の都市集中化、移動の増加にともなう近隣の人間関係の変化や電化製品の使用の増加、楽器の普及などで大きな問題になってきている。これは、世界的な傾向と考えられる。この騒音は、日常生活に伴って発生するもので、音源の近傍に限られた範囲に影響を及ぼし、音源の種類が多いこと、発生場所、発生時間が不特定になることが多いことなど交通騒音とは様子が異なる点がある。

近隣騒音で、よく問題となる音源の例を挙げると、自動車、犬・猫の声、子供の泣き声や騒ぐ声、話声、ピアノ等の楽器の演奏音、ステレオ装置の音、階上の床音、排水音、ドアの開閉音、クーラーの音、階段の通行音、テレビ・ラジオの音、洗濯機の音、入浴の音等限りがない。

これらは、外国でも日本でも“気になる”とされているものが多いが、生活様式、住居形態などが違えば、当然、気になる音源も変わってくるはずである。

日本と西ドイツで、居住環境が比較的近似していると考えられる集合住宅の住民を対象にした生活騒音に関するアンケートの例では、両者が必ずしも同じ音源の音を気にしているのではないことがわかる。

日本では、オートバイ、もの売りの声、子供や青少年の声、近所の自動車の

音などの空気伝搬音（音波として空気中を伝わってくる音）が聞こえる比率の高い音としてあげられ、西ドイツでは、バスやトイレの音、日曜大工の音、廊下と階段の音、掃除機の音など固体伝搬音（固体、例えば、天井、床、壁などの中を振動が伝わって、室内に音として放射されるもの）が聞こえる比率の高い音になっている。

また、悩まされる比率の高い音として、日本では、オートバイの音、もの売りの声、階上の家の床の音、近所の自動車の音、ステレオの音が挙げられるのに対して、西ドイツでは、オートバイの音、ドアの開閉の音、近所の自動車の音、階上の家の床の音、ステレオの音などが挙げられている。また、日本では、苦情が皆無に近い台所用電化製品の音、タイプライターの音などが聞こえると高い比率で悩みの種になっている。

これに対して、ゲームの音、カラオケの音、もの売りの声などは日本独自のものとみられる。もっとも、カラオケの方は、海外での伸びも目を見張るものがあるといわれるので、現在では、共通になってきているのかも知れない。

これらの騒音の受けとめ方は、よくいわれるように個人差が大きい。音楽などにその典型的な例が見られる。一般に、自分の好みの音楽を聴いているときには、相当の音量で聴いていても丁度良いと感じるが、好みでないジャンルの音楽を聴くときには、正確にいうと、聴かされるときには、それほどの音量でなくても、うるささの方が先になる。

この個人差は、好みの問題だけでなく、その人の騒音に対する感受性にも大きく依存する。騒音に比較的慣れ易い人と慣れにくい人とでは、後者の方がいろいろな種類の音源の音に対して、わずらわしいと感じ易い。また、その人の生活、作業への集中度にも関係がある。これは、万国共通のことのようである。

騒音の感じ方、受けとり方には、これ以外の問題が関係することも多い。

その最大のものの一つを近隣騒音の感じ方、受けとり方に見ることができる。日本でも、昔は、近隣騒音はそれほどの問題にはならなかった。現在より、一戸建て住宅でも、集合住宅でも遮音や防音という観点では、格段に悪く、近所からの音が聞こえやすかったのにもかかわらず、今よりも深刻さが少なかった。これは、地域共同体としての近所の人々の結びつきが強く、暖かさがあり、大家族的な、仲間的な感覚が強かったためと考えられる。これが、人口密度が上がり、都市に集中するようになると、住民の交代の早さが増してくることも絡

んで、近所の人々のつながりが、薄くなって、近隣騒音の問題の深刻化に相当強く働いていると思われる。

いろいろな調査結果を見ても、人口の多いところほど、近隣騒音そのものも増えるが、近隣騒音の影響を受け易いという結果が多い。

以前に、集合住宅の4階に住んでいたときに、子供が幼く、よく椅子の上から床に飛び降りたり、走り廻ったりして遊んでいたが、階下の家のご主人がその音を聴いて、「ああ、また、小ネズミが遊んでるぞ」といっていたと聞いて、子供好きで助かったと感じた。日頃から、下の家とよく行き来していたのが、良かったのでもある。

こちらも、そのご主人が夜遅く酔っぱらって大声で歌いながら帰ってきて、「ああ、また、飲んできたな」と思うだけで、別段、気にもならなかった。

東京都の主婦を対象にした、ある近隣騒音のアンケート調査では、隣家とのつきあいが深くなるほど、隣の音が“気になる、邪魔になる”という回答が減少する傾向を示し、逆に、“親しみを感じる”という回答が増加する傾向が見られる。地域的にも、近所とのつきあいを好み、地域的な活動への参加の多い地域と近所との交流が少なく、孤立的な傾向の地域とでは、話声に対する反応でも、“邪魔だ”という反応は、前者では後者での約1/4と少なく、大きな開きがある。また、学校の音に対する反応でも、“邪魔だ”とする比率は、前者では後者の1/1.25と差がある。

これから考えると、近隣騒音に対する問題での近所の人々とのつきあいの大切さがよくわかる。

いずれにしても、騒音問題に関しては、被害者になりたくないし、まして、加害者には絶対になりたくないものである。

(財団法人空港環境整備協会・航空環境研究センター)